

たのかたはふねにてくだらせ給

〔落窪物語四〕そちは、この二十八日になん船に乗なん日取たりければ、出でたちさらにいとちか

し。○中 おとな三十人、わらは四人、しもづかへ四人、なん率てくだる員に定めたりつる日のちか

うなるまゝに、はらからたちみなわたりあつまりて、今は別れをしみ、あはれなることをのたま

ふ。○中 明後日くだり給ふとて、左の大きい殿にたいめんしたてまつらでは、いかでかとして参りた

まふ。車の多からんは所せしとて、三つばかりしてなん打わたりける。北のかたたいめんして聞

え給へる事どもは書す思ひやるべし、たれもく御供にくだる人々に、北のかたたいとよく去た

る扇。二十、螺すりたる櫛。まき繪の箱に白粉入れて、この人のかたらひけるして、かたみに見た

まへとてとらず、子だちも思ふやうに心ばせ有りて、人に思はるゝとうれしく思ゆ。○中 つとめ

て文あり。○中 まき繪の御衣櫃。一よろひに、かたつかたには、正身の御さうぞくみくだり、色々の

織ものうちかさなりたり、上には、唐櫃の大きに満ちたる幣ぶくろに、中に扇百いれて打覆ひた

まへり、又ちひさき衣ばこ。一よろひあり、此御むすめにおこせ給へるなるべし、かたつかたには、

御さうぞく一具、片つかたには、黄金の箱にし。ろいもの入てすゑちひさき御ぐしの箱入れたり、

くはしく書べけれどむづかし、

〔萬葉集四〕五年。○神 戊辰、大宰少貳石川足人朝臣遷任、餞于筑前國蘆城驛家歌。三首、

天地之神、毛助與草枕、霧行君之至家左右、

大船之念憑師、君之去者、吾者將戀名直相左右二、

山跡道之島乃浦廻爾、緣浪間無牟、吾戀卷者、

右三首、作者未詳、

〔萬葉集十九〕閏三月。○天平勝 於衛門督大伴古慈悲宿禰家、餞之入唐副使同胡麻呂宿禰等歌二首、